

SENSOR



TOPICS トピックス

警報が出たら、いつ避難しますか？ ～行動につながる新しい防災気象情報～

2026年5月29日から、気象庁が発表する防災気象情報が大きく変わります。今回の見直しでは、大雨、河川氾濫、土砂災害、高潮に関する情報が、5段階の警戒レベルに対応する形で、シンプルに整理されます。これにより、「危険度」と「取るべき行動」が、これまでより直感的に分かりやすくなることが期待されています。

では、警報等を受け取った際に、実際にどのような行動をとればよいのでしょうか？新しい防災気象情報の概要と、意識しておきたいポイントを整理します。

1 直観的に分かる「危険度」と「取るべき行動」

2026年5月29日からの、新しい防災気象情報¹⁾では、大雨、河川氾濫、土砂災害、高潮に関する情報が、注意報は警戒レベル2で黄色、警報は警戒レベル3で赤といったように、5段階の警戒レベルに応じた数字と色によってシンプルで分かりやすく伝えられます(図1)。

		河川氾濫 1級河川などの 大河川の氾濫	大雨 低地の浸水や 大河川以外の氾濫	土砂災害 急傾斜地のがけ崩れや 土石流	高潮 海水面上昇や 波の打上げによる浸水	(警戒レベルごとの) 住民が とるべき行動
時間 推 移 の イ メ ー ジ 災害 発生 2時間前～ 0時間前 数時間前～ 3時間前 半日～ 数時間前 数日～ 1日前	警戒レベル 5相当	レベル5 氾濫特別警報	レベル5 大雨特別警報	レベル5 土砂災害特別警報	レベル5 高潮特別警報	命の危険 直ちに安全確保!
	<警戒レベル4までに危険な場所からかならず避難!>					
	警戒レベル 4相当	レベル4 氾濫危険警報	レベル4 大雨危険警報	レベル4 土砂災害危険警報	レベル4 高潮危険警報	危険な場所から全員避難
	警戒レベル 3相当	レベル3 氾濫警報	レベル3 大雨警報	レベル3 土砂災害警報	レベル3 高潮警報	避難に時間を要する人は早めに避難、避難の準備など
	警戒レベル 2	レベル2 氾濫注意報	レベル2 大雨注意報	レベル2 土砂災害注意報	レベル2 高潮注意報	避難行動を確認(避難場所や避難ルート、避難のタイミングなど)
警戒レベル 1	早期注意情報				災害への心構えを高める	

▲図1 新しい防災気象情報の情報体系とその名称 (出典:気象庁資料 ※研究所にて一部追記)

今回の見直しの背景には、防災気象情報が必ずしも住民の避難行動に結びついていなかった、という課題があります。従来も、避難行動に応じた5段階の警戒レベルは設けられていましたが、例えば、同じ「警戒レベル3」に相当する情報の中に、警報と注意報が混在するなど、これらの情報を受けても「どの程度危険なのか」「何をすればいいのか」が分かりにくい状況でした。

こうした課題を踏まえ、「防災気象情報に関する検討会²⁾」(以下、検討会)では、気象庁、有識者、報道関係者、関係機関などが参加し、防災気象情報の体系整理について議論が行われました。検討会では、情報の分かりやすさや避難行動への結び付きなどについて幅広く検討が進められ、その一環として検討会で実施された一般の方向けアンケートでは、「特別警報」などの情報名よ

りも、「警戒レベル 5」のように数字で危険度を示したほうが、「どれくらい危険なのか」「何をすべきか」を理解しやすいことが示されました(アンケートは後掲のコラムを参照)。

これらの検討を踏まえ、今回の見直しでは、防災気象情報を「5段階の数字と色」で整理し、危険度と取るべき行動を直観的に把握しやすい形で示されることとなりました。例えば、警戒レベル4相当の大雨では、「レベル4 大雨危険警報」のように、情報名の冒頭にレベルの数字が付記される形で発表されます。今回の見直しは、単に情報の名称を変えるだけでなく、取るべき行動を判断しやすくすることが目的です。

2 レベル3またはレベル4の段階での早めの行動が重要

今回の見直しで特に重要なのは、「警戒レベルによって、取るべき行動が分かる」という点です。レベル1～5までの情報が時系列で発表され、危険度の高まりに応じた対応が求められます。

「レベル3(警報)」は、高齢者や障害のある方、乳幼児がいる家庭など、避難に時間を要する人が避難を始める段階です。それ以外の人も、避難場所や避難経路を確認し、いつでも避難できる準備を進める必要があります。

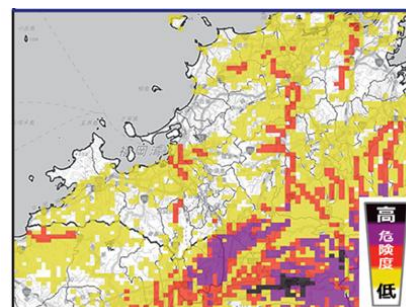
「レベル4(危険警報)」は、危険な場所にいる人が全員避難する段階です(「危険警報」は今回の見直しで新設)。レベル4が出た段階では、「まだ大丈夫」と様子を見るのではなく、避難行動に移ることが重要です。

一方、「レベル5(特別警報)」は、すでに災害が発生していたり、命の危険が切迫している段階です。この段階では、屋外へ避難すること自体が危険な場合もあり、自宅の2階以上や崖から離れた部屋へ移動するなど、その場で少しでも命を守る行動が求められます。つまり、レベル5を待って避難するのではなく、レベル3またはレベル4の段階で前もって行動することが大切です。

3 警報が発表されたら、どのように行動すべきか？

では、実際に警報等が発表されたとき、私たちはどのように行動すればよいのでしょうか。警報等は市区町村単位で発表されることが多いものの、同じ市区町村内でも、川沿い、低地、高台、山沿い、崖の近くなど、場所によって危険度は異なります。そのため、警報が発表された際には、「自分の周辺でどの程度危険が高まっているのか」を把握することが重要です。自宅や勤務先、学校、移動先など、現在いる場所の状況を確認し、それぞれの場所に応じた行動を取る必要があります。

その際に役立つのが、気象庁の防災情報サイト「キキクル³⁾」です(図2)。キキクルでは、大雨などによる災害の危険度を、色分けされた地図上でほぼリアルタイムに確認できます。警報等が発表されたら、キキクルや市区町村からの避難情報等を確認し、自分がいる場所で危険度が高まっているかを把握することが重要です。キキクルは、スマートフォンでも確認できるほか、民間気象会社や損害保険会社などが提供する一部の防災アプリ・情報サイトでも利用できます。



▲図2 大雨キキクル (出典:気象庁資料)

ただし、災害時に情報を確認するだけでは、必ずしも迅速な避難行動にはつながりません。大切なのは、平時のうちにハザードマップ等を確認し、「自宅は浸水想定区域に入っているのか」「どこへ、どのように避難するのか」「夜間や大雨の中でも安全に移動できるのか」などをあらかじめ考えておくことです。災害の危機が迫ってから避難先や避難行動を検討し始めると、対応が遅れるおそれがあります。

4 最後に

気候変動の影響もあり、近年は極端な降水のリスクが高まっています。これまで大きな災害が少なかった地域でも、経験したことのないような大雨に見舞われる可能性があります。その意味で、防災気象情報は、自分や家族の行動を決めるための情報として、誰もが「我が事」として受け止める必要があります。

今回の見直しは、「行動につなげる」ことが目的です。これは個人の避難行動だけでなく、企業や組織の防災対応においても重要な視点です。事業者においても、従業員の安全確保や出社判断などについて、警戒レベルに応じた対応をあらかじめ整理しておくことが重要です。今回の見直しを機に、BCPや災害時の初動対応をあらためて確認しておくことも有効と考えられます。

災害時に最も難しいのは、「情報を受けたあとに、実際に行動すること」です。避難は、危険が切迫してからでは間に合わない場合もあります。だからこそ重要なのは、「警戒レベル3・4の段階で避難を開始すること」、そして、そのために「平時から備えておくこと」です。いざという時に自分がどう行動するのかを、日頃から具体的に想像しておくことが大切です。

最後に、今回の防災気象情報の見直しにあたり、「防災気象情報に関する検討会」にて座長を務められた、京都大学防災研究所

の矢守克也先生よりコメントをいただきましたので、掲載いたします。

京都大学防災研究所 矢守克也教授のコメント

防災気象情報は、台風や川の状況などについて知らせるだけでなく、自分や大切な人の身を守るなど、情報を受けとった人の行動に結びつくことが大切です。そこで今度の変更では、この情報は「何をすることを促しているのか」をわかりやすく示すことを重視しました。そのために、大雨、土砂災害といった災害の種類とは関係なく、とるべき行動をレベル(数字)の形で統一的に表現することにしました。

だから、新たな情報名称はすべて「レベルと数字」で始まっています。それだけ、レベル(数字)が重要だということです。しかも、各レベルには色(カラーコード)がついています。「特別警報」といった漢字表記の情報名称よりも、レベル 5(黒)など数字と色による表現の方がユニバーサル、つまり、子どもや外国人などを含めてだれにでもわかりやすいと考えたからです。

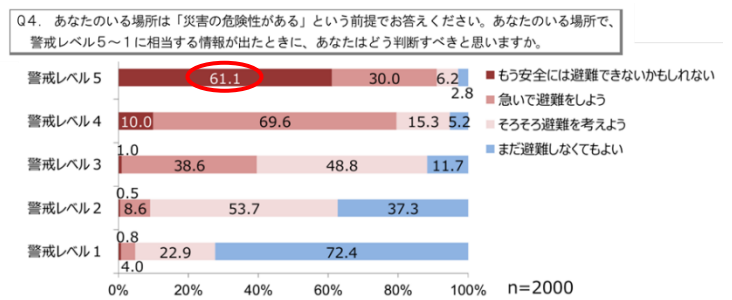
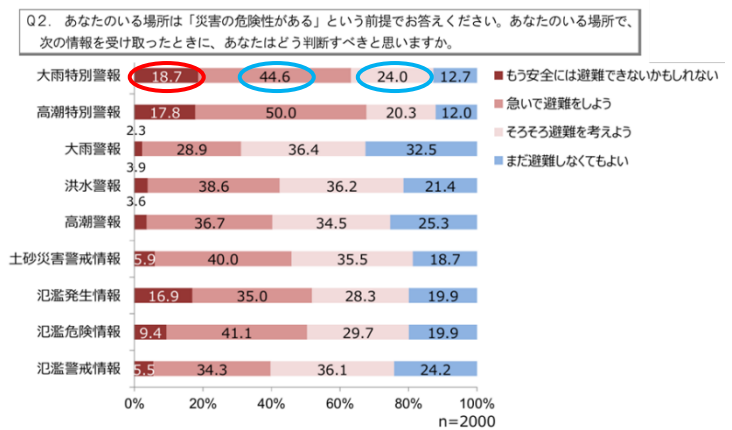
この発想にはお手本があります。地震発生時に各地の揺れの大きさを示す「震度」です。「震度」には 100 年以上の歴史があり、当初、「震度」は、「微震」「強震」のように言葉だけで表現されていました。それが、「数字と言葉」(「震度 4(強震)」)を経て、現在の「数字だけ」の形(「震度 3」など)へと変化してきました。知人が住んでいる町が「震度 6 弱」と知れば、「かなり被害があったかも」などと、多くの人が一瞬にして同じイメージをもてることは、実は大きな財産なのです。

防災気象情報についても、近い将来、「レベル 3」と聞けば「高齢者は避難開始」、「レベル 5」と聞けば「不用意に屋外に出ない方がいい」など、レベル(数字)だけでみなが同じ対応イメージを共有するようになってほしいと願っています。



◀コラム▶ 「警戒レベル相当情報の名称に係る一般向けアンケート調査結果」から分かること

- 災害の危険性がある場所にいる前提で、「大雨特別警報」を受け取った場合にどう判断するかを尋ねたところ、44.6%が「急いで避難をしよう」、24.0%が「そろそろ避難を考えよう」と回答しており、多くの人が「これから避難を始める段階」と受け止めていたことが伺えます。一方、「もう安全には避難できないかもしれない」と答えた人は 18.7%にとどまりました(図上段)。「大雨特別警報」は「警戒レベル5」に相当し、本来、すでに災害が発生している可能性が極めて高く、直ちに安全な場所で命を守る行動を取るべき段階を示す情報です。しかし実際には、本来の意味との間に、認識のギャップがあった可能性があります。
- 一方、同じ前提で「警戒レベル5~1」の5段階の数字で情報を受け取った場合にどのように判断するかを尋ねたところ、「警戒レベル 5」については、61.1%の人が「もう安全には避難できないかもしれない」と回答しました(図下段)。
- つまり、このアンケート結果からは、「特別警報」など情報名で伝えるよりも、「警戒レベル 5」のようにレベルの数字で危険度を示したほうが、受け手が「どれくらい危険なのか」「何をすべきか」を直感的に理解しやすいことが分かります。



▲図 一般向けアンケート調査の結果 (出典: 防災気象情報に関する検討会資料)

(主任研究員 荒木孝夫)

- 1) 「新たな防災気象情報について(令和8年~)」 気象庁ホームページ: <https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/bosai/keiho-update2026/index.html>
- 2) 「防災気象情報の体系整理と最適な活用に向けて」 防災気象情報に関する検討会, 令和 6 年 6 月: https://www.jma.go.jp/jma/kishou/shingikai/kentoukai/bousaikishoujouhou/report/R060618_report.pdf
- 3) 「キキクル」 気象庁ホームページ: <https://www.jma.go.jp/bosai/risk/>